

# Oracle® Database

クイック・インストール・ガイド

10g リリース 2 (10.2) for Linux Itanium

部品番号 : B50696-01

2009 年 1 月

---

## 1 はじめに

このマニュアルで説明されている各種サービスは日本オラクル社から提供されるサービスです。サービスは、製品をご購入された日本オラクル正規代理店各社から提供される場合もありますが、サービス内容はこのマニュアルの説明と異なることがあります。

このマニュアルでは、Oracle Database 10g を Linux Itanium システムにすばやくインストールする方法を説明します。次の内容について説明します。

1. このマニュアルの概要
2. `root` としてのシステムへのログイン
3. ハードウェア要件の確認
4. ソフトウェア要件の確認
5. 必要なオペレーティング・システム・グループおよびユーザーの作成
6. カーネル・パラメータの構成
7. 必要なディレクトリの作成
8. `oracle` ユーザーの環境の構成
9. 製品ディスクのマウント
10. Oracle Database のインストール
11. Oracle Database 10g Companion CD からの製品のインストール
12. インストール後の作業
13. 追加情報
14. ドキュメントのアクセシビリティについて

## 2 このマニュアルの概要

このマニュアルでは、デフォルトのインストール・オプションを使用して Oracle Database をインストールする方法を説明します。

### このマニュアルで説明するタスク

このマニュアルでは、次のタスクを説明します。

- Oracle Database をサポートするためのシステムの構成
- 「基本インストール」オプションを使用したローカル・ファイル・システムへの Oracle Database のインストール
- データベース・ファイルの格納にローカル・ファイル・システムを使用する汎用 Oracle Database の構成

**ORACLE®**

Copyright © 2009, Oracle.  
All rights reserved.

Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

## 正しくインストールされた場合の結果

Oracle Database のインストールに成功すると、次の状態になります。

- 作成したデータベースおよびデフォルトの Oracle Net リスナー・プロセスがシステム上で稼働します。
- Oracle Enterprise Manager Database Control および iSQL\*Plus が稼働中となり、Web ブラウザからアクセスできます。

## このマニュアルで説明しないタスク

このマニュアルでは、「基本インストール」の使用例を取り上げますが、次のタスクの実行方法は説明しません。

- 「拡張インストール」オプションを使用したソフトウェアのインストール
- すでに Oracle ソフトウェアが存在するシステムへのソフトウェアのインストール
- クラスタへの Oracle Clusterware および Oracle Real Application Clusters (RAC) のインストール
- Enterprise Manager の電子メール通知または自動バックアップの有効化
- データベース記憶域としての自動ストレージ管理または RAW デバイスなどの代替記憶域の使用

## 追加インストール情報の入手先

このマニュアルで説明されていない情報を含む Oracle Database のインストール方法の詳細は、次のいずれかのマニュアルを参照してください。

- ソフトウェアを単一システムにインストールする場合は、『Oracle Database インストールレーション・ガイド for Linux Itanium』を参照してください。
- RAC インストールを実行する場合は、『Oracle Database Oracle Clusterware および Oracle Real Application Clusters インストールレーションおよび構成ガイド』を参照してください。このマニュアルでは、RAC インストールの前提条件である Oracle Clusterware のインストール方法も説明しています。

この 2 つのマニュアルは製品ディスクに収録されています。これらのマニュアルにアクセスするには、Web ブラウザを使用して、インストール媒体のトップレベル・ディレクトリにある welcome.htm ファイルを開き、「ドキュメント」タブを選択します。

## 3 root としてのシステムへのログイン

Oracle Database をインストールする前に、root ユーザーとしていくつかのタスクを実行する必要があります。root ユーザーとしてログインするには、次の手順の 1 つを実行します。

---

**注意：** ソフトウェアは、X Window System ワークステーション、X 端末または X サーバー・ソフトウェアがインストールされている PC またはその他のシステムからインストールする必要があります。

---

- ソフトウェアを X Window System ワークステーションまたは X 端末からインストールする場合、次の手順を実行します。
  1. X 端末 (xterm) など、ローカル・ターミナル・セッションを開始します。

2. ソフトウェアをローカル・システム以外にインストールする場合、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル X サーバーに表示できるように次のコマンドを入力します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

例:

```
$ xhost somehost.us.acme.com
```

3. ソフトウェアをローカル・システム以外にインストールする場合、ssh、rlogin または telnet コマンドを使用して、ソフトウェアをインストールするシステムに接続します。

```
$ telnet fully_qualified_remote_host_name
```

4. root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

- X サーバー・ソフトウェアがインストールされた PC またはその他のシステムからソフトウェアをインストールする手順は、次のとおりです。

---

**注意:** このタスクの実行方法の詳細は、必要に応じてご使用の X サーバーのドキュメントを参照してください。使用している X サーバー・ソフトウェアによっては、タスクの実行順序が異なる場合があります。

---

1. X サーバー・ソフトウェアを起動します。
2. X サーバー・ソフトウェアのセキュリティ設定を構成して、リモート・ホストの X アプリケーションをローカル・システム上で表示できるようにします。
3. ソフトウェアをインストールするリモート・システムに接続し、そのシステムで X 端末 (xterm) などのターミナル・セッションを開始します。
4. リモート・システムに root ユーザーとしてログインしていない場合は、次のコマンドを入力して、ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
password:
#
```

## 4 ハードウェア要件の確認

システムは、少なくとも次のハードウェア要件を満たしている必要があります。

- 1024MB 以上の物理 RAM
- 次の表に、インストールされている RAM と構成されているスワップ領域の要件との関係を示します。

RAM	スワップ領域
1024 ~ 2048MB	RAM のサイズの 1.5 倍
2049 ~ 8192MB	RAM のサイズと同等
8192MB 以上	RAM のサイズの 0.75 倍

- /tmp ディレクトリ内の 400MB のディスク領域

- インストール・タイプに応じて Oracle ソフトウェア用の 1.5 ～ 3.5GB のディスク領域
- ファイル・システム記憶域を使用する事前構成済データベース用の 1.2GB のディスク領域（オプション）

---

**注意：** 自動ストレージ管理または RAW デバイス記憶域を使用するデータベースのディスク領域の要件については、この章で後述します。

---

自動バックアップの構成を選択する場合は、追加のディスク領域（ファイル・システムまたは自動ストレージ管理ディスク・グループ内のいずれか）がフラッシュ・リカバリ領域に必要です。

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. 物理 RAM のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep MemTotal /proc/meminfo
```

システムにインストールされている物理 RAM のサイズが必要なサイズに満たない場合は、追加のメモリーをインストールしてから続行してください。

2. 構成されているスワップ領域のサイズを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep SwapTotal /proc/meminfo
```

追加のスワップ領域の構成方法は、必要に応じてご使用のオペレーティング・システムのマニュアルを参照してください。

3. 使用可能な RAM およびスワップ領域を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# free
```

4. /tmp ディレクトリ内の空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k /tmp
```

/tmp ディレクトリで使用できるディスク領域が 400MB 未満の場合は、次の手順の 1 つを実行します。

- /tmp ディレクトリから不要なファイルを削除します。
- oracle ユーザーの環境を設定する場合（後述します）は、TEMP および TMPDIR 環境変数を設定します。
- /tmp ディレクトリを含むファイル・システムを拡張します。ファイル・システムの拡張方法は、必要に応じてシステム管理者に確認してください。

5. システムで使用できる空きディスク領域の量を調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# df -k
```

次の表に、各インストール・タイプにおけるソフトウェア・ファイルのディスク領域の要件（概算）を示します。

インストール・タイプ	ソフトウェア・ファイルの要件 (GB)
Enterprise Edition	1.85
Standard Edition	1.85
カスタム（最大値）	1.99

6. システム・アーキテクチャがソフトウェアを実行できるかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep "model name" /proc/cpuinfo
```

このコマンドにより、プロセッサ・タイプが表示されます。プロセッサのアーキテクチャが、インストールする Oracle ソフトウェアのリリースと一致していることを確認します。予想していた出力が表示されない場合、このシステムにソフトウェアをインストールすることはできません。

## 5 ソフトウェア要件の確認

ご使用のオペレーティング・システムのディストリビューションおよびバージョンごとに、システムが少なくとも次のソフトウェア要件を満たしている必要があります。

---

---

**注意：** Oracle Universal Installer は、記載されている要件を満たしているかどうか確認するために、システムのチェックを実行します。これらのチェックが確実に成功するように、Oracle Universal Installer を起動する前に要件を確認してください。

---

---

- オペレーティング・システムが次のいずれかであること。
  - Red Hat Enterprise Linux 3.0 (Update 4 以上)
  - Red Hat Enterprise Linux 4.0 (Update 1 以上)
  - SUSE Linux Enterprise Server 8.0 (SP4 以上)
  - SUSE Linux Enterprise Server 9.0 (SP2 以上)
- 次 (またはそれ以上) のカーネル・バージョンがシステムで稼働していること。
  - **Red Hat Enterprise Linux 3.0 の場合**  
2.4.21-20.EL
  - **Red Hat Enterprise Linux 4.0 の場合**  
2.6.9-11.EL
  - **SUSE Linux Enterprise Server 8.0 の場合**  
2.4.21-278
  - **SUSE Linux Enterprise Server 9.0 の場合**  
2.6.5-7.201
- 次のパッケージ (またはそれ以上のバージョン) がインストールされていること。
  - **Red Hat Enterprise Linux 3.0 の場合**  
make-3.79.1-17  
control-center-2.2.0.1-13  
gcc-3.2.3-47  
gcc-c++-3.2.3-47  
gdb-6.1post-1.20040607.52  
glibc-2.3.2-95.30  
glibc-common-2.3.2-95.30  
glibc-devel-2.3.2-95.30  
glibc-devel-2.3.2-95.20 (32 bit)  
compat-db-4.0.14-5.1  
compat-gcc-7.3-2.96.128  
compat-gcc-c++-7.3-2.96.128

```
compat-libstdc++-7.3-2.96.128
compat-libstdc++-devel-7.3-2.96.128
gnome-libs-1.4.1.2.90-34.2 (32 bit)
libstdc++-3.2.3-47
libstdc++-devel-3.2.3-47
openmotif-2.2.3-3.RHEL3
sysstat-5.0.5-5.rhel3
setarch-1.3-1
libaio-0.3.96-3
libaio-devel-0.3.96-3
```

- **Red Hat Enterprise Linux 4.0 の場合**

```
binutils-2.15.92.0.2-10.EL4
compat-db-4.1.25-9
control-center-2.8.0-12
gcc-3.4.3-9.EL4
gcc-c++-3.4.3-9.EL4
glibc-2.3.4-2
glibc-common-2.3.4-2
gnome-libs-1.4.1.2.90-44.1
libstdc++-3.4.3-9.EL4
libstdc++-devel-3.4.3-9.EL4
make-3.80-5
pdksh-5.2.14-30
sysstat-5.0.5-1
xscreensaver-4.18-5.rhel4.2
```

- **SUSE Linux Enterprise Server 9 の場合**

```
gcc-3.3.3
gcc-c++-3.3.3
glibc-2.3.3
libaio-0.3.102-1.2ia64
libaio-devel-0.3.102-1.2ia64
make-3.80
```

インストールする Oracle 製品について、システムは次の製品固有の要件を満たしている必要があります。

- PL/SQL のネイティブ・コンパイル、Pro\*C/C++、Oracle Call Interface、Oracle C++ Call Interface および Oracle XML Developer's Kit (XDK)

Intel C++ Compiler 8.1 以上、およびディストリビューションについて前述した GNU C および C++ コンパイラのバージョンは、これらの製品でも使用できます。

**注意：**Intel C++ Compiler v8.1 以上はサポートされています。ただし、これはインストールには必要ありません。Red Hat Enterprise Linux 3 では、OCCI は GNU C++ コンパイラのバージョン 3.2 でサポートされています。これがデフォルトのコンパイラのバージョンです。OCCI は、gcc 3.2.3 標準テンプレート・ライブラリに対応した Intel Compiler v8.1 でもサポートされています。

Oracle XML Developer's Kit は、Red Hat Linux 4.0 の GCC ではサポートされていません。Intel C++ Compiler (ICC) でのみサポートされています。

Red Hat Enterprise Linux 4.0 では、Oracle C++ Call Interface (OCCI) は GCC 3.4.3 をサポートしていません。Red Hat Enterprise Linux 4.0 で OCCI を使用するには、GCC 3.2.3 をインストールする必要があります。

- Oracle JDBC/OCI ドライバ

Oracle JDBC/OCI ドライバでは、次のバージョンの JDK を使用できます。

- Sun JDK 1.4.2

システムがこれらの要件を満たしていることを確認するには、次の手順を実行します。

1. Linux のディストリビューションおよびバージョンを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# cat /etc/issue
```

---

**注意：** この項で前述したディストリビューションおよびバージョンのみがサポートされます。その他のバージョンの Linux にソフトウェアをインストールしないでください。

---

2. 必要なカーネルのバージョンがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# uname -r
```

次に、Red Hat Enterprise Linux 3.0 システムでこのコマンドを実行して取得されたサンプル出力を示します。

```
2.4.21-27.EL
```

この例では、出力はカーネル・バージョン () およびエラータ・レベル (27.EL) を示しています。

3. 必要なパッケージがインストールされているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# rpm -q package_name
```

パッケージがインストールされていない場合、またはバージョンが必要なバージョンに満たない場合は、ご使用の Linux の配布媒体からインストールするか、または必須パッケージを Linux のベンダーの Web サイトからダウンロードしてください。

4. CSD for WebSphere MQ が必要な場合は、ダウンロードおよびインストールの情報について次の Web サイトを参照してください。

```
http://www.ibm.com/software/integration/mqfamily/support/summary/lin.html
```

## 6 必要なオペレーティング・システム・グループおよびユーザーの作成

Oracle Database をインストールする場合、次のローカル・オペレーティング・システム・グループおよびユーザーが必要です。

- Oracle インベントリ・グループ (oinstall)
- OSDBA グループ (dba)
- Oracle ソフトウェア所有者 (oracle)
- 権限のないユーザー (nobody)

これらのグループおよびユーザーがすでに存在しているかどうかを調べる場合、または必要に応じて作成する場合は、次の手順に従います。

1. oinstall グループが存在しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# more /var/opt/oracle/oraInst.loc
```

このコマンドの出力結果が `oinstall` グループ名を示している場合、そのグループはすでに存在しています。

`oraInst.loc` ファイルが存在する場合、このコマンドの出力結果は次のようになります。

```
inventory_loc=/u01/app/oracle/oraInventory
inst_group=oinstall
```

`inst_group` パラメータは、Oracle インベントリ・グループの名前 `oinstall` を示しています。

2. `dba` グループが存在しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# grep dba /etc/group
```

このコマンドの出力結果が `dba` グループ名を示している場合、そのグループはすでに存在しています。

3. 必要に応じて次のコマンドを入力し、`oinstall` グループおよび `dba` グループを作成します。

```
# /usr/sbin/groupadd oinstall
# /usr/sbin/groupadd dba
```

4. `oracle` ユーザーが存在し、正しいグループに属しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# id oracle
```

`oracle` ユーザーが存在する場合は、このコマンドにより、ユーザーが属しているグループに関する情報が表示されます。出力結果は次のようになります。`oinstall` がプライマリ・グループで、`dba` がセカンダリ・グループであることが示されています。

```
uid=440(oracle) gid=200(oinstall) groups=201(dba),202(oper)
```

5. 必要に応じて、次の処理の1つを実行します。

- `oracle` ユーザーが存在していても、プライマリ・グループが `oinstall` ではないか、そのユーザーが `dba` グループのメンバーではない場合は、次のコマンドを入力します。

```
# /usr/sbin/usermod -g oinstall -G dba oracle
```

- `oracle` ユーザーが存在しない場合は、次のコマンドを入力して作成します。

```
# /usr/sbin/useradd -g oinstall -G dba oracle
```

このコマンドにより `oracle` ユーザーが作成され、プライマリ・グループとして `oinstall`、セカンダリ・グループとして `dba` が指定されます。

6. 次のコマンドを入力して、`oracle` ユーザーのパスワードを設定します。

```
# passwd oracle
```

7. `nobody` ユーザーが存在しているかどうかを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
# id nobody
```

このコマンドに `nobody` ユーザーに関する情報が表示される場合、ユーザーを作成する必要はありません。

`nobody` ユーザーが存在しない場合は、次のコマンドを入力して作成します。

```
# /usr/sbin/useradd nobody
```

## 7 カーネル・パラメータの構成

次の表のカーネル・パラメータが、表の推奨値以上の値に設定されていることを確認します。表の後の手順で、値の検証および設定方法を説明します。

パラメータ	値	ファイル
semmsl	250	/proc/sys/kernel/sem
semmns	32000	
semopm	100	
semmni	128	
shmall	2097152	/proc/sys/kernel/shmall
shmmax	物理メモリーのサイズの半分 (バイト)	/proc/sys/kernel/shmmax
shmmni	4096	/proc/sys/kernel/shmmni
file-max	65536	/proc/sys/fs/file-max
ip_local_port_range	最小値 : 1024 最大値 : 65000	/proc/sys/net/ipv4/ip_local_port_range
rmem_default	1048576	/proc/sys/net/core/rmem_default
rmem_max	1048576	/proc/sys/net/core/rmem_max
wmem_default	262144	/proc/sys/net/core/wmem_default
wmem_max	262144	/proc/sys/net/core/wmem_max

**注意：** この表に記されている値よりも高い値がいずれかのパラメータに設定されている場合、その値を変更しないでください。

これらのカーネル・パラメータに現在指定されている値を表示し、必要に応じて変更するには、次の手順を実行します。

1. カーネル・パラメータの現在の値を表示するには、次のようなコマンドを入力します。

**注意：** 現在の値を書き留め、変更する必要がある値を特定してください。

パラメータ	コマンド
semmsl、semmns、semopm および semmni	# /sbin/sysctl -a   grep sem このコマンドにより、セマフォ・パラメータの値がリストされている順序で表示されます。
shmall、shmmax および shmmni	# /sbin/sysctl -a   grep shm
file-max	# /sbin/sysctl -a   grep file-max
ip_local_port_range	# /sbin/sysctl -a   grep ip_local_port_range
rmem_default	# /sbin/sysctl -a   grep rmem_default
rmem_max	# /sbin/sysctl -a   grep rmem_max

パラメータ	コマンド
wmem_default	# /sbin/sysctl -a   grep wmem_default
wmem_max	# /sbin/sysctl -a   grep wmem_max

2. いずれかのカーネル・パラメータの値が推奨値と異なる場合、次の手順を実行します。

任意のテキスト・エディタを使用して、`/etc/sysctl.conf` ファイルを作成または編集し、次のように行を追加または変更します。

---

**注意：** 変更するカーネル・パラメータの値の行のみを含めてください。セマフォ・パラメータ (`kernel.sem`) の場合、4つの値すべてを指定する必要があります。ただし、現在の値が推奨値よりも大きい場合、大きい方の値を指定してください。

---

```
kernel.shmall = 2097152
kernel.shmmax = 2147483648
kernel.shmuni = 4096
kernel.sem = 250 32000 100 128
fs.file-max = 65536
net.ipv4.ip_local_port_range = 1024 65000
net.core.rmem_default = 1048576
net.core.rmem_max = 1048576
net.core.wmem_default = 262144
net.core.wmem_max = 262144
```

`/etc/sysctl.conf` ファイルで値を指定することにより、システムを再起動した後も値が維持されます。

SUSE システムの場合のみ、次のコマンドを入力し、システムの再起動時に `/etc/sysctl.conf` ファイルを読み込ませます。

```
# /sbin/chkconfig boot.sysctl on
```

## oracle ユーザーのシェルの制限の設定

ソフトウェアのパフォーマンスを向上するには、次に示す、oracle ユーザーのシェルの制限を増加する必要があります。

シェルの制限	limits.conf の項目	強い制限
オープンなファイル記述子の最大数	nofile	65536
シングル・ユーザーに対して使用可能なプロセスの最大数	nproc	16384

シェルの制限を増加するには、次の手順を実行します。

1. 次の行を `/etc/security/limits.conf` ファイルに追加します。

```
oracle      soft  nproc  2047
oracle      hard  nproc  16384
oracle      soft  nofile 1024
oracle      hard  nofile 65536
```

2. 次の行が `/etc/pam.d/login` ファイルに存在しない場合は追加します。

```
session    required  pam_limits.so
```

- oracle ユーザーのデフォルトのシェルに応じて、デフォルトのシェル起動ファイルに次のいずれかの変更を加えます。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合、次の行を /etc/profile ファイル (SUSE システムの場合は /etc/profile.local ファイル) に追加します。

```
if [ $USER = "oracle" ]; then
    if [ $SHELL = "/bin/ksh" ]; then
        ulimit -p 16384
        ulimit -n 65536
    else
        ulimit -u 16384 -n 65536
    fi
fi
```

- C シェルの場合、次の行を /etc/csh.login ファイル (SUSE システムの場合は /etc/csh.login.local ファイル) に追加します。

```
if ( $USER == "oracle" ) then
    limit maxproc 16384
    limit descriptors 65536
endif
```

## 8 必要なディレクトリの作成

次のような名前のディレクトリを作成し、それらのディレクトリに、適切な所有者、グループおよびアクセス権を指定します。

- Oracle ベース・ディレクトリ
- オプションの Oracle データ・ファイル・ディレクトリ (オプション)

Oracle ベース・ディレクトリには 3 GB の空きディスク領域、Oracle データファイル・ディレクトリを別に作成しない場合は、4 GB の空きディスク領域が必要です。

Oracle ベース・ディレクトリを作成するには、次の手順を実行します。

1. 次のコマンドを入力して、マウントされているすべてのファイル・システムに関する情報を表示します。

```
# df -k
```

2. 表示された情報から、この項で前述したディスク領域要件を満たす 1 つまたは 2 つのファイル・システムを特定します。
3. 特定した各ファイル・システムのマウント・ポイント・ディレクトリの名前を書き留めます。
4. 次のようなコマンドを入力して、特定したマウント・ポイント・ディレクトリに推奨サブディレクトリを作成し、適切な所有者、グループおよび許可を設定します。

```
# mkdir -p /mount_point/app/oracle_sw_owner
# chown -R oracle:oinstall /mount_point/app/oracle_sw_owner
# chmod -R 775 /mount_point/app/oracle_sw_owner
```

たとえば、特定したマウント・ポイントが /u01 で、Oracle ソフトウェア所有者のユーザー名が oracle の場合、推奨される Oracle ベース・ディレクトリ・パスは次のようになります。

```
/u01/app/oracle
```

## 9 oracle ユーザーの環境の構成

Oracle Universal Installer は、oracle アカウントから実行します。ただし、Oracle Universal Installer を起動する前に、oracle ユーザーの環境を構成する必要があります。環境を構成するには、次の設定が必要です。

- シェル起動ファイルで、デフォルトのファイル・モード作成マスク (umask) を 022 に設定します。
- DISPLAY 環境変数を設定します。

oracle ユーザーの環境を設定するには、次の手順を実行します。

1. X 端末 (xterm) など、新しいターミナル・セッションを開始します。
2. X Window アプリケーションがこのシステムで表示できることを確認するために、次のコマンドを入力します。

```
$ xhost fully_qualified_remote_host_name
```

3. 次の手順の 1 つを実行します。
  - ターミナル・セッションがソフトウェアのインストール先のシステムに接続されていない場合は、そのシステムに oracle ユーザーとしてログインします。
  - ターミナル・セッションがソフトウェアのインストール先のシステムに接続されている場合は、ユーザーを oracle に切り替えます。

```
$ su - oracle
```

4. oracle ユーザーのデフォルトのシェルを調べるには、次のコマンドを入力します。

```
$ echo $SHELL
```

5. oracle ユーザーのシェル起動ファイルをテキスト・エディタで開きます。
  - Bourne シェル (sh)、Bash シェル (bash)、または Korn シェル (ksh) の場合：

```
$ vi .bash_profile
```

- C シェル (csh または tcsh) の場合：

```
% vi .login
```

6. シェル起動ファイルで次の行を入力または編集して、デフォルトのファイル・モード作成マスクに値 022 を指定します。

```
umask 022
```

7. ORACLE\_SID、ORACLE\_HOME または ORACLE\_BASE 環境変数がファイルで設定されている場合は、ファイルから対応する行を削除します。
8. ファイルを保存して、エディタを終了します。
9. シェルの起動スクリプトを実行するには、次のコマンドを入力します。

- Red Hat 上の Bash シェルの場合：

```
$ . ~/.bash_profile
```

- Bourne シェル、SUSE 上の Bash シェル、または Korn シェルの場合：

```
$ . ~/.profile
```

- C シェルの場合：

```
% source ~/.login
```

10. ソフトウェアのインストール先がローカル・システムではない場合は、ローカル・システムに表示するために、次のようなコマンドを入力して、Xアプリケーションに指示します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合：

```
$ DISPLAY=local_host:0.0 ; export DISPLAY
```

- C シェルの場合：

```
% setenv DISPLAY local_host:0.0
```

この例で `local_host` は、Oracle Universal Installer の表示に使用するシステム (ワークステーションまたは PC) のホスト名または IP アドレスです。

11. ハードウェア要件を確認したときに /tmp ディレクトリの空きディスク領域が不十分と判断した場合は、必要な空き領域があるファイル・システムを特定して、TMP および TMPDIR 環境変数を次のように設定します。

- a. `df -k` コマンドを使用して、十分な空き領域がある適切なファイル・システムを特定します。
- b. 必要に応じて、次のようなコマンドを入力して、特定したファイル・システム上に一時ディレクトリを作成し、そのディレクトリに適切な許可を設定します。

```
$ su - root
# mkdir /mount_point/tmp
# chmod a+wr /mount_point/tmp
# exit
```

- c. 次のようなコマンドを入力して、TMP および TMPDIR 環境変数を設定します。

Bourne、Bash または Korn シェルの場合：

```
$ TMP=/mount_point/tmp
$ TMPDIR=/mount_point/tmp
$ export TMP TMPDIR
```

C シェルの場合：

```
% setenv TMP /mount_point/tmp
% setenv TMPDIR /mount_point/tmp
```

12. ORACLE\_HOME および TNS\_ADMIN 環境変数が設定されていないことを確認するために、次のコマンドを入力します。

- Bourne、Bash または Korn シェルの場合：

```
$ unset ORACLE_HOME
$ unset TNS_ADMIN
```

- C シェルの場合：

```
% unsetenv ORACLE_HOME
% unsetenv TNS_ADMIN
```

13. 環境が正しく設定されたことを確認するには、次のコマンドを入力します。

```
$ umask
$ env | more
```

`umask` コマンドにより値 22、022 または 0022 が表示されていること、およびこの項で設定した環境変数に適切な値が設定されていることを確認します。

## 10 製品ディスクのマウント

ほとんどの Linux システムでは、製品ディスクをドライブに挿入すると自動的にマウントされます。ディスクが自動的にマウントされない場合は、次の手順を実行してマウントします。

1. ユーザーを root に切り替えます。

```
$ su - root
```

2. 必要に応じて、次のようなコマンドを入力して現在マウントされているディスクを取り出し、ドライブから取り除きます。

- Red Hat の場合：

```
# eject /mnt/dvd
```

- SUSE の場合：

```
# eject /media/dvd
```

この例では、/mnt/dvd および /media/dvd はディスク・ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

3. ディスクをディスク・ドライブに挿入します。
4. ディスクが自動的にマウントされたことを確認するには、次のようなコマンドを入力します。

- Red Hat の場合：

```
$ ls /mnt/dvd
```

- SUSE の場合：

```
$ ls /media/dvd
```

5. このコマンドによってディスクの内容が表示されない場合、次のようなコマンドを入力します。

- Red Hat の場合：

```
# mount -t iso9660 /dev/dvd /mnt/dvd
```

- SUSE の場合：

```
# mount -t iso9660 /dev/dvd /media/dvd
```

この例では、/mnt/dvd および /media/dvd はディスク・ドライブのマウント・ポイント・ディレクトリです。

## 11 Oracle Database のインストール

oracle ユーザーの環境を構成した後、次のようにして Oracle Universal Installer を起動し、Oracle Database をインストールします。

---

---

**注意：** DVD からソフトウェアをインストールする場合は、次のようなコマンドを使用します。

```
$ /mount_point/db/runInstaller
```

---

---

1. Oracle Universal Installer を起動するには、次のコマンドを入力します。

```
$ /mount_point/db/runInstaller
```

Oracle Universal Installer が起動しない場合、『Oracle Database インストール・ガイド for Linux Itanium』で、X Window の表示エラーのトラブルシューティングに関する情報を参照してください。

2. 次の表に、Oracle Universal Installer の各画面で推奨するアクションを説明します。次のガイドラインを使用して、インストールを完了します。
  - より詳細な情報が必要な場合、またはデフォルト以外のオプションを選択する場合、「ヘルプ」をクリックすると追加情報が表示されます。
  - ソフトウェアのインストール時またはリンク時にエラーが発生した場合、『Oracle Database インストール・ガイド for Linux Itanium』のトラブルシューティングに関する情報を参照してください。

---

**注意：** 前述のタスクを完了している場合、ほとんどの画面でデフォルトを選択してインストールを完了できます。

---

画面	推奨するアクション
インストール方法の選択	<p>デフォルトでは、「基本インストール」オプションが選択されています。</p> <p>Oracle ホームのディレクトリ・パスを指定します。UNIX DBA グループ oinstall が選択されていることを確認します。初期データベースを作成する場合は、初期データベースの名前およびパスワードを設定します。「次へ」をクリックします。</p> <p><b>注意：</b> この画面は「基本インストール」オプションおよび「拡張インストール」オプションで構成されています。カスタム・インストールを使用する場合は、「拡張インストール」オプションを選択してください。</p>
インベントリ・ディレクトリおよび接続情報の指定	<p>この画面は、システム上に初めて Oracle 製品をインストールする場合にのみ表示されます。</p> <p>Oracle インベントリ・ディレクトリのフルパスを指定します。選択されているオペレーティング・システム・グループが oinstall であることを確認します。「次へ」をクリックします。</p>
製品固有の前提条件の確認	<p>前提条件の確認がすべて成功したかどうかを確認してから、「次へ」をクリックします。</p> <p>Oracle Universal Installer は、システムが Oracle ソフトウェアを実行するように正しく構成されているかどうかを確認します。このマニュアルに記載されているインストール前の手順をすべて実行した場合は、すべての確認が成功します。</p> <p>確認に失敗した場合は、画面に表示された失敗の原因を確認してください。可能であれば、問題を修正して確認を再実行します。システムが要件を満たしていることを確認した場合は、失敗した確認のチェック・ボックスを選択して、要件を手動で確認することもできます。</p>
サマリー	<p>この画面に表示されている情報を確認して、「インストール」をクリックします。</p>
インストール	<p>「インストール」画面には、製品のインストール中にステータス情報が表示されます。</p>
コンフィギュレーション・アシスタント	<p>この画面には、ソフトウェアの構成およびデータベースの作成を実行するコンフィギュレーション・アシスタントのステータス情報が表示されます。このプロセスの終了時にメッセージが表示された場合は、「OK」をクリックして続行します。</p>

画面	推奨するアクション
構成スクリプトの実行	プロンプトが表示されたら、指示を読み、この画面に表示されたスクリプトを実行します。「OK」をクリックして続行します。
インストールの終了	<p>コンフィギュレーション・アシスタントにより、Oracle Enterprise Manager Database Control を含めたいくつかの Web ベース・アプリケーションが構成されます。この画面には、これらのアプリケーションに対して構成された URL が表示されます。使用されている URL を書き留めます。これらの URL で使用されているポート番号は、次のファイルにも記録されています。</p> <pre>oracle_home/install/portlist.ini</pre> <p>Oracle Universal Installer を終了するには、「終了」をクリックしてから「はい」をクリックします。</p>

## 12 Oracle Database 10g Companion CD からの製品のインストール

Oracle Database 10g Companion CD には、インストール可能なその他の製品が収録されています。これらの製品のインストールが必要かどうかは、使用する Oracle Database 製品または機能によって異なります。次の製品または機能を使用する場合は、Companion CD から Oracle Database 10g 製品をインストールする必要があります。

- JPublisher
- Oracle JVM
- Oracle *interMedia*
- Oracle JDBC Development Drivers
- Oracle SQLJ
- Oracle Database のサンプル
- Oracle Text 提供のナレッジ・ベース
- Oracle Ultra Search
- Oracle HTML DB
- Oracle Workflow サーバーおよび中間層コンポーネント

Companion CD からソフトウェアをインストールする方法の詳細は、『Oracle Database Companion CD クイック・インストール・ガイド for Linux Itanium』を参照してください。

## 13 インストール後の作業

Oracle Database のこのリリースについて理解するために、次のタスクを実行することをお勧めします。

- Web ブラウザから Oracle Enterprise Manager Database Control にログインします。
- Oracle Enterprise Manager Database Control は、1 つの Oracle Database インストールの管理に使用できる Web ベースのアプリケーションです。Database Control のデフォルトの URL は、次のようになります。

```
http://host.domain:1158/em/
```

ログインするには、ユーザー名 **SYS** を使用して **SYSDBA** として接続します。Oracle Database 10g のインストール時にこのユーザーに対して指定したパスワードを使用します。

- 『Oracle Database インストレーション・ガイド for Linux Itanium』の、必須およびオプションのインストール後のタスクを参照してください（使用する製品によって異なります）。
- 『Oracle Database インストレーション・ガイド for Linux Itanium』の、Database Control を使用してインストール済データベースの構成を確認する方法を参照してください。
- Oracle Enterprise Manager Database Control を使用してデータベースを管理する方法については、『Oracle Database 2 日でデータベース管理者』を参照してください。

このマニュアルは、新しい Oracle DBA を対象としており、Database Control を使用して、Oracle Database インストールのあらゆる面を管理する方法を説明します。また、インストール時に構成しなかった可能性がある、電子メール通知および自動バックアップを使用可能にする方法も説明しています。

## 14 追加情報

この項では、次の内容について説明します。

- [製品のライセンス](#)
- [サポートおよびサービス](#)

### 製品のライセンス

このメディア・パックに含まれている製品は、トライアル・ライセンス契約に基づき、30日間、インストールおよび評価できます。ただし、30日間の評価期間後もいずれかの製品の使用を継続する場合、プログラム・ライセンスをご購入いただく必要があります。

### サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

**Oracle サポート・サービス** オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html>

**製品マニュアル** 製品のマニュアルは、次の URL にあります。

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html>

**研修およびトレーニング** 研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

[http://education.oracle.com/pls/web\\_prod-plq-dad/db\\_pages.getpage?page\\_id=3](http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3)

**その他の情報** オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

<http://www.oracle.com/lang/jp/index.html>

<http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html>

---

---

**注意：** ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

---

---

## 15 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/accessibility/> を参照してください。

### ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかしスクリーン・リーダーは括弧だけの行を読まない場合があります。

### 外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

### Oracle サポート・サービスへの TTY アクセス

アメリカ国内では、Oracle サポート・サービスへ 24 時間年中無休でテキスト電話 (TTY) アクセスが提供されています。TTY サポートについては、(800)446-2398 にお電話ください。

---

Oracle Database クイック・インストール・ガイド, 10g リリース 2 (10.2) for Linux Itanium  
部品番号: B50696-01

Oracle Database Quick Installation Guide, 10g Release 2 (10.2) for Linux Itanium

原本部品番号: B15675-01

Copyright © 2009, Oracle. All rights reserved.

#### 制限付権利の説明

このプログラム (ソフトウェアおよびドキュメントを含む) には、オラクル社およびその関連会社に所有権のある情報が含まれています。このプログラムの使用または開示は、オラクル社およびその関連会社との契約に記載された制約条件に従うものとします。著作権、特許権およびその他の知的財産権と工業所有権に関する法律により保護されています。

独立して作成された他のソフトウェアとの互換性を得るために必要な場合、もしくは法律によって規定される場合を除き、このプログラムのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイル等は禁止されています。

このドキュメントの情報は、予告なしに変更される場合があります。オラクル社およびその関連会社は、このドキュメントに誤りがないことの保証は致し兼ねます。これらのプログラムのライセンス契約で許諾されている場合を除き、プログラムを形式、手段 (電子的または機械的)、目的に関係なく、複製または転用することはできません。

このプログラムが米国政府機関、もしくは米国政府機関に代わってこのプログラムをライセンスまたは使用する者に提供される場合は、次の注意が適用されます。

#### U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, use, duplication, disclosure, modification, and adaptation of the Programs, including documentation and technical data, shall be subject to the licensing restrictions set forth in the applicable Oracle license agreement, and, to the extent applicable, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software--Restricted Rights (June 1987), Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このプログラムは、核、航空、大量輸送、医療あるいはその他の本質的に危険を伴うアプリケーションで使用されることを意図しておりません。このプログラムをかかるとして使用する際、上述のアプリケーションを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性 (redundancy)、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。万一かかるプログラムの使用に起因して損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切責任を負いかねます。

Oracle, JD Edwards, PeopleSoft, Siebel は米国 Oracle Corporation およびその子会社、関連会社の登録商標です。その他の名称は、他社の商標の可能性があります。

このプログラムは、第三者の Web サイトへリンクし、第三者のコンテンツ、製品、サービスへアクセスすることがあります。オラクル社およびその関連会社は第三者の Web サイトで提供されるコンテンツについては、一切の責任を負いかねます。当該コンテンツの利用は、お客様の責任になります。第三者の製品またはサービスを購入する場合は、第三者と直接の取引となります。オラクル社およびその関連会社は、第三者の製品およびサービスの品質、契約の履行 (製品またはサービスの提供、保証義務を含む) に関しては責任を負いかねます。また、第三者との取引により損失や損害が発生いたしましても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。